

アーカイブ 通信 No.25

No.25

2022.7.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

事務局(住所移転・メールアドレスも変更)

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F

tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

シンポジウム 報告

〈目録〉と〈検索〉を考える

—ミニコミとの出会いをコーディネート

2022年2月6日 立川市子ども未来センター

快に解説された。

ポイントは、

- ①目録は手段にすぎない
- ②完成形をイメージする
- ③資料に合う記述要素を選ぶ
- ④目的に合う編成基準を選ぶ
- ⑤紙とデジタルを使い分けるの5つ。

このうち③記述要素とは、タイトル・作成者・年月日・ユニークコードなど、史資料を構成する情報を指す。

また④編成基準とは、形態別分類(書籍・書類・手紙・写真・物)、内容別分類(日本十進分類法や主題別に基づく区分)、機能別分類(誰がどのような目的で作成したのかに注目)などがある。これらの基準のどれを用いるかについては柔軟であってよいが、必ず情報の互換性が保たれる必要がある。

⑤紙とデジタルの比較では、総覧性(情報を塊で把握する。意図せぬ発見)では紙の方が優れているが、情報を正確迅速に探し出す点ではデジタルの方が便利である。

手段としての目録の基本

浅井良亮さん

(法政大学大学院兼任講師)

浅井さん

んは、史料保存機関などでの実務経験を踏まえて、アーキビストの視点から目録作成の基本を明



人を育てる目録づくり

江森隆子さん(元都立図書館司書、紙芝居文化推進協議会)

江森さんからは図書館という公的組織、紙芝居文化に



関わる市民団体という異なる立場からの目録作成の経験が語られた。都立中央図書館では、特定テーマごとに冊子体の図書目録(たとえば「東京都立図書館蔵地方史誌関係図書目録」)を作成し、関係図書館に配布をした。この作業に図

いずれにせよ、「目録は手段にすぎない」。

利用・管理の両面から、目録作成の目的に立ち返ることの大切さを強調された点が印象的であった。

書館の参考担当全体が関わっていた。書誌づくりは、図書館と利用者をつなぐ役割を果たすと同時に、図書館内で「人を育てる」という発想によって支えられていた。

紙芝居文化の活動としては、刊行物や新聞記事等に出た関連情報を収集しながら「紙芝居文庫情報」を作成してきた。関心をもつ者千人程度というマイナーな文化だが、書誌づくりには熱心な図書館関係者が集まっている。作成のためには、さまざまな新聞記事現物を見る必要がある。市民としての書誌づくりを可能にするためにも、資料が公的に保管されていることが大切だと、江森さんは指摘する。目録という結果だけでなく、作成プロセス自体にも意味があるという指摘からは、学ぶことが多かった。

法政大学・環境アーカイブズ見学会

1970～90年代のミニコミを見に行こう！

2022年8月20日(土)

午後1時30分集合～4時

訪問先：法政大学・大原社会問題研究所
環境アーカイブズ

集合場所：法政大学多摩キャンパス
総合棟正面玄関前

(相原駅・めじろ台駅・西八王子駅からバス)

内容：当会発足のきっかけとなった都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー資料群の資料整理がほぼ終わり公開されています。①どのように保存・公開されているのか、②それぞれが見たい1970～90年代の市民活動資料の探索・紹介を行います(具体的にしたいミニコミ紙名や分野がありましたら事前にお知らせください)。

・定員15人(先着順) ・参加費無料

・申込先：ネットワーク・市民アーカイブ
tel・fax：042-396-2430

資料に触れる経験の入口

高原太一さん(大学非常勤講師、砂川平和ひろばメンバー)

砂川平和ひろばメンバー



高原さんからは砂川闘争の歴史を継承・保存する市民団体のメンバーとして、どのように検索や目録を活用するか、ユーズーとしての経験が語られた。市民アーカイブ多摩と砂川は、内容的接点は少ないと思っていたが、実際に資料にふれると発見があった。昔のミニコミに平和ひろばのメンバーや元担任などの親しい人が見つかる、資料に対して他人行儀ではいられなくなる。見つけた情報をも一度、当事者に戻していくことも可能になる。砂川闘争の研究者として、現実の問題が存在し続けていることも改めて思い知らされた。

今、誰が資料を残すのかという課題がある。政治学者の松下圭一流に言えば、「市民型責任者」としての市民アーカイブと言えるのかもしれない。市民アーカイブ多摩はお寺や神社の石碑のようなものとたええられるかもしれない。来歴はよくわからないが、いろいろなものが集まっている。思いがけないものもある。目録は、石

碑のそばに建てられた説明文や関心の入口になるものである。

コロナ禍で図書館に入れない期間が続いたため、図書館利用に関わる身体動作が学生から失われてしまった。こもるためには体力や慣れが必要で、今の学生はその経験をもてないまま大切な時期を過ごしている。

図書館検索の可能性と限界

堀内寛雄さん

(元国立国会図書館職員)



堀内さんは国会図書館の憲政資料室で所蔵する個人文書目録作成を担当された経験を踏まえながら、目録作成の実際を豊富な資料で紹介された。また、ホームページ上で目録にアクセスしながら、検索の仕方を実演された。政治家や政党に関する文書類の基本目録と主題別の専門書誌が作成され、インターネット上で実際に活用できること、刊行図書だけでなく、さまざまな史資料を収蔵する組織としての図書館の可能性が紹介された。

報告の最後でミニコミなど市民活動資料を収蔵する組織

との連携として、図書館が果たす可能性についても言及された。本紙『アーカイブ通信』を例にとり、国会図書館や都立図書館の統合検索機能および多摩地域各図書館の所蔵検索で調べても、ごく一部の機関図書室を除きヒットしてこない(多摩地域全公立中央図書館に送付しているにもかかわらず)。実際に図書館を訪問して確認すると地域資料などとして保存されているものの、所蔵情報に外からはわからない場合が多いようである。

市民がつくる小さなミニコミ資料は、図書館の目録に載りにくいなど、解決すべき課題があることを指摘された。

□質疑応答

参加者：浅井さんのお話で、目録は手段にすぎないとあつたが、目的は誰がどう設定するか。都立図書館ではどのような決めていたのか？

江森：目的は参考調査業務のためである。都立では各主題室で所蔵資料を的確・迅速に役立てるために、索引、年譜、図版など、資料の特性にあわせた視点で数多くのカード目録を維持し、利用者からの調査にも、図書館からの問い合わせにも使っていた。その中でニーズが多いものが冊子目録となり残っている。

市民アーカイブ多摩の四季①

夏 アジサイ

梅雨時期から夏の初めまで、門前で看板代わりをしてくれる紫色の立派なアジサイ。挿し木にしたいと所望されることも。市民アーカイブもあちこちに挿し木されると良いのだけだ。



梅雨に似合う花、アジサイには、小さな実の形からハイドランジア(水の器)という属名がつけられています。原種とされるガクアジサイでは、実がでる小さな花が多数集まっており、大きな雄花(装飾花)が周囲を飾っていますが、アジサイでは全ての花が装飾花に変化しており、美しさと引き換えに、実はできません。江戸時代に長崎の出島にオランダ人としてやってきた、ドイツ人医師で博物学者のシーボルトが、

遊女であった滝という女性との間に一女をもうけます。しかし国外追放となり、帰国後の1839年にアジサイの学名としてハイドランジア・オタクサ(お滝さんとされる)を発表しました。娘の楠本イネは西洋医学を学んで日本で初めての女性産科医となり、再来日したシーボルトと再会します。

(邑田仁・むらたじん)

元東大小石川植物園園長

参加者：都立図書館が作った『市民運動目録』(1980年)はなぜ作られたのか。当時の目録作成の背景は？

江森：美濃部都政の下で、当時に関心が高かった。市民の直接要求だけでなく、社会の要求を職員が読み取って提起することもあった。84年にも作っている。職員の感性によるところも大きい。

浅井：目録作成の目的は、いろいろな次元がある。例えば、利用

者への情報提供、管理者の資料把握など。ターゲットを明確にし、それに必要な情報を精査する必要がある。また、段階的整理という考え方があつた。とりあえずこういう資料があるという速報的目録を作成し、次の段階でより利用しやすいもの、詳細なものを作るという方法だ。

堀内：憲政資料は、以前はある程度の整理段階での目録をもとに資料を公開していた。ただし、一部の文書については詳細な



て、分類して、整理して、保存するという過程の協議も人が行ない、それが活動の一部となる。目録は手段だけとは言い切れない面がある。そのプロセスがエネルギー源にもなる。目録作成のエネルギーはどこからくるのだろうか。

浅井…目録を作る活動自体に価値があることは実感しており、その活動や思いを大切にしたい。ただ、目録作成を自己目的化してしまうと、いつまでも目録が完成しない状況に陥ってしまう。目録作成の目的は何か、どのような目録とするのか、を絶えず自覚する必要がある。

参加者…市民アーカイブはそれ自体市民運動でもあるため、どこにエネルギーを見出すかは大切。また、市民アーカイブのアーカイブも大切だと思う。

浅井…案外にも自分たちの活動の資料を残していないことが多い。活動のエネルギーやその軌跡を残していくこと、アーカイブすることは大切。

参加者…図書館とアーカイブの両方をつなげていくことが重要。情報のとりまとめとして図書館の役割が大切ではないか。

高原…市史編纂の過程で公立図書館は充実してきている。ただ、自治体内の活動のすべてをカバーしているわけではない。市が住民の活動と対抗している場合もある。利用者は

図書館、アーカイブ、現場の人の間を自由に移動しながら資料を探す必要がある。ただしこの間、図書館や大学は体力がなくなってきた。過去を知らない職員も多い。

参加者…公共図書館とはどのような関係があるのか？

参加者…1978年から30年間、調布の図書館で働いていた。市民資料の場合データは作っておらず、ファイルして地域資料コーナーに並んでいる。地元の図書館は地域に対して責任をもっている。受入れ簿はあるので、問い合わせが

あれば対応は可能である。

参加者…自分が所属する資料館ではミニコミに近いものも含めて万を超える図書がある。しかし館独自の分類をしているため、そのまま図書館の検索システムに搭載することはできない。利用者が検索できるシステムは現状ない。また、今日の議論では、主題別分類目録の善し悪し、この点についての議論が欠けているように思う。主題別分類目録は便利な反面で、提供側が定めた基準で便宜上分類したにすぎないにもかかわらず、その分類に縛ら

れてしまう利用者が現れ、見方を狭めてしまう恐れがある。なので、あえて分類はせず編年目録とし、選択は利用者にかかせるという手もある。また、目録の読みやすさは重要で、あまり詰め込まず、載せたい情報は精査する必要がある。

参加者…市民として発信しているものが図書館などのデータになっていないことを認識すべきと考えた。次の目録作成を考えると、公共図書館にどうすれば置いてもらえるかも、考えていく必要がある。

(記録・町村敬志＝運営委員)

ネットワーク・市民アーカイブ2022定期総会報告 資料目録・長期計画・連携強化



6月5日(日)11時から、2022年度定期総会を開催しました。正会員17人(委任状参加22人)と賛助会員2人の参加がありました。

21年度の活動報告として、例年通り開館、催し、通信の発行などを行ったこと、加えて岸中書庫の整備が進んだこと、新たな目録作りに向

けて検討を開始したこと、長期計画を考える必要があること、そして法政大学環境アーカイブズに所蔵されている、当会発足のきっかけとなった都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー資料の整理作業がほぼ終わり、全面公開されたことなどの報告がありました。

22年度は、開館業

務や催し・通信発行に加え、①新たな人員(会員・運営委員・当番・ボランティアなど)の確保、②資料目録の改訂、③長期計画着手、④資料収集方針の検討、⑤関連団体の連携強化について取り組むことが承認されました。

運営委員会の他に、資料部会・広報部会・企画部会なども動いており、会員であればどなたも参加歓迎です。市民アーカイブ多摩の資料整理や資料収集ボランティアなども募集しています。より多くの方に関わっていただくことが「市民」アーカイブの本旨でもありますので、今年度もご一緒に、よろしく願いいたします。

(江頭晃子＝運営委員)

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

ひろば

会の創立は1979年。きっかけは平塚駅西口に場外馬券売り場建設計画が持ち上がった時、子どもたちの教育環境の悪化を懸念した母親たちの建設反対署名活動だった。

計画白紙撤回後、有志の話し合いにより学習の場として「平塚母親の会」を創設し(96年)「ひろばの会」に改称、翌年(80年)会報誌月刊『ひろば』(寄稿誌)を創刊した。以後40余年に亘り現在まで活動の形態は変わっていない。

『ひろば』は過去において100号力ウンとごとに記念号を発行し、昨年末500号を迎えた。以前はそのときどきの時代の関心ごとを企画、編集してきたが、今回はコロナ禍にあつて、イ

ベント企画は不可能となり「寄稿特集」として47編を収めた「記念号」となった。

会の長い活動期間と『ひろば』継続はメディアでも紹介された。「教育、平和、女性、まちづくりの問題などを題材に学習会を開き、会報は月1回」(神奈川新聞22.12.12付)。「会員でもあった大蔵律子さん(82)を87年の市議選に押し立てた：市議4期の後2003年に当時の現職を破って市長にもなった」(読売新聞22.12.6付)。

会員は現在85名、女性会員はもとより男性会員も徐々に増えて年齢層も幅広い。また平塚市外会員も全体の40%を超えるなど長い年月をかけての広がりも活動の成果である。

会が支持され、継続を可能にしているのは価値観の多様化や高齢化、コロナ禍など、世の中の変化を受け止めながら『ひろば』が交流の場としての機能を果たしているからに他ならない。そして『ひろば』活動のもうひとつの意味は市井の人たちの生きざ

たこの木通信

『たこの木通信』は、1987年9月の準備号から今月で417回を重ねます。

発行の主体は「たこの木クラブ」という多摩市を中心に活動する小さな市民団体です。「障害の有無に関わらず、誰もが地域でともに生きる」ことを願い、長年活動しています。

当初は、「子どもたちどうしの関係づくり」をテーマに、「障害」を理由に子どもを分けようとする学校を巡る課題や子どもどうしの日常的な出会いを求め

ま、想い、時代の空気を記録してきたことである。長い年月をかけての積み重ねはいつの間にか私たちの生きた証となっていた。これまで『ひろば』に関わった多くの人々たちによる「証」の存在を際立たせた今回の『500号記念号』でもある(寄稿47編収録・無料配布中、希望者は左記連絡先へ)。今後もこの活動が引き継がれることを希望する。

配布先は、会員のほか、平塚図書館、平塚26か所の公民館、ひらつか市民活動センター、市民アーカイブ多摩他。団体支援として他団体の要請があれば『ひろば』発送時にチラシを同封している。(山田真美子)



る記事が掲載されていました。

子どもは「大人」の階段を上っていきます。その一段一段に「障害」を理由とした壁があり、ともに育つ子どもたちの中で「障害児」と呼ばれる人たちが取り残されています。時に地域から奪われてしまう現実もあります。

私たちの取り組みは、長年の取り組みの中で成人した「障害当事者の自己選択・自己決定・自己実現の支援」をテーマに、「障害の有無に関わらず、誰もが地域で暮らし続ける」取り組みへと変化してきました。

折々に現れる課題に向きあう中、通信の内容も変化しました。「ともに」という願いは「支援」にまつわる想いや現実へ。

学校という場や子どもに関する事柄は、人が暮らすための「制度」や「自立生活」や「社会」にまつわる記事へと変化しました。

当初あった固有な詞も、個別の課題が増えるにつれインシヤル表記となり、個々に現れる課題を一般化して発信するように

- ・1987年創刊、月刊、約900部、B5判28～32頁(付録「ねじり草」4頁)。
 - ・会員:6000円、賛助会員3000円、通信購読会員1200円/年
 - ・E-mail: takonoki@dream.jp/ <https://takonoki.net/>
 - ・当館所蔵:186号(2003年)～
- ▽414号内容=絶対的貧困家庭の世帯主15年目にして思ったこと、「出入り禁止」ってそれ自慢?のろけ?武勇伝?、第4回たこの木連続講座準備中、お知らせ他

なりました。「投稿歓迎!」「原稿はそのまま載せる」「載せた後から考える」と、なんでもありの記事が多数掲載されています。時に代表批判なども載つていたりします。また、スタッフの記事よりも投稿記事が多い月もあります。「会報」というよりも「ミニコミ」と称する人もいます。「障害当事者支援」という括りに捉われず、事柄は異っても共通する課題や投稿者の自己表現の場にもなっています。

毎月、公共施設で発行作業を行っています。部数が増えるにつれ、1日で終わることが難しくなり、今日ではPDF版たこの木通信」もネット上からダウンロードできるようになりました。PDF版は300号までCD販売しています。

毎月発行のたこの木通信。インターネットが普及する中「ジン(人)ターネット」を大切にす通信であり続けたいと思います。(若橋誠治)



- ・1980年創刊、月刊、300部、B5判、4～8頁。
 - ・年会費:1500円
 - ・tel:0463-88-4339(山田)
 - ・当館所蔵:472号(2019年)～(記念号別途有)
- ▽502号内容=海岸林切ること、食事でかかる新型栄養失調、心に「番地」が出来るまで、編集室より

第8期 緑蔭トーク報告

第1回 4月23日

近年の「若者」の社会運動

—SASPL、SEALDs、
「辺野古」県民投票から

元山仁士郎（「辺野古」県民投票
の会元代表／一橋大学大学院）

◆若者当事者からの発信

今回の緑蔭トークでは、2010年代の「若者」（10〜20代）を中心とする社会運動について、当該分野の先行研究を参照しながら、報告者自身が参加した運動を軸に報告を行った。「若者」の社会運動は、近年のグレタ・トゥーンベリに代表



されるように、とくに気候変動問題をめぐって世界各地で活発になっており、日本でも中高生が参加する集会やデモがみられる。また、「若者」の社会運動に関する論文や雑誌・新聞記事は枚挙に暇がなく、その中には主催・参加者へのインタビューも含まれるものの、「当事者」による分析・報告が行われる機会は貴重と言えるのではないだろうか。

◆先行研究を辿る

まず、報告者は、栗原彬『やさしさのゆくえ』現代青年論（1981）や富永京子『社会運動と若者』（2017）、樋口直人・松谷満編著『3・11後の社会運動』（2020）といった先行研究で、社会運動がどのように論じられているかを紹介した。その中では、「若者」という世代で括る限界はあるものの、社会的なモトリウムや「動機」の語彙」として運動が活発に行われると説明される。そして、2015年の反安保法制のデモに参加した20代、30代は100人に1人いるとされる。

しかしながら、近年、「若者」の間には権威主義的なものへの支持や、デモへの反感も一定程度存在する。実際、報告者も小中高大学の同級生から、「反対運動は過激」、「どちらかの立場を取りたくない／中立でいたい」と

言われたことがある。また、沖縄の基地問題については、どんなに日本政府に「反対」と声をあげても聞いてもらえないのであればという諦めが広がっている現状もある。

◆沖縄との出会い

この背景には、先行研究において、労働組合や、学生自治会、サークルといった中間集団の弱体化、学費の値上げ、雇用の流動化などから、立場の短期性・流動性が、若者をはじめ流動的な立場にある者に「当事者」として「社会を変えることに対し、心理的な距離を置く理由」となっていると指摘がなされている。これに対し、運動に参加し続ける報告者は、11年3月の東日本大震災／福島第一原発

事故を契機として、浪人時代に東京で通っていた塾の先生との出会いを通じて沖縄での体験／経験を言語化することができ、さらに大学の先生や同級生らとの出会い・支えから社会運動に参加していった経験を述べた。無論、報告者の関心とは自身の出身地である沖縄へと向かい、19年に行われた辺野古米軍基地建設の是非を問う沖縄県民投票に携わるなど、大学院での研究の傍ら、自分のできる範囲で行動を起こし続けている。

【参加者の感想から】
・運動することそのものが困難な中、ご自身の経験から自分ごととして考え、自分の言葉で語るというのが特に印象に残った。
・ご自身の体験に基づいたもので、説得力があった。
・多数決での賛成・反対ではなく、少数派の声をどのように受けとめるのか、具体的には対話が鍵になると思った。
・デモの形態に若者との違いを痛感した。世代を超えて共有できる街頭運動の形態は？
・いろいろな問題があるけど、大事なのはIssueの違いではなく、「声をあげた人がいるかどうか」というのが印象に残った。
・社会運動の世代的引き継ぎはどうやったらうまくなされるか、考えさせられた。

岸中書庫報告（最終回）

新書庫の募集・確保・整備と2年が経過しました。データベース上での所蔵場所入力や、現開架書庫からの追加搬入などの作業は残っていますが、温度・湿度計測を含め、岸中書庫の開架業務も軌道にのりつつあります。14㎡の小さな書庫ですが、今回の作業を通して、新たな人とのつながりができ、発見もありました。

特に、現在の開架書庫から岸中書庫（閉架）に移送する資料選定にあたり、市民組織発行の

比較的製本がしっかりしている雑誌類がどれぐらい多摩地域の中央図書館に所蔵されているのか調査しました。その結果、当館でしか閲覧できない資料が多いことが分かりました。また、図書館内で市民活動資料・通信の所蔵を検索すると、データベース上で登録していない図書館が多いのです。東京・多摩地域全体として、どう市民活動資料を収集・保存していくのか、図書館との共同調査や連携の課題も見えてきました。



全号揃った朝日ジャーナル

所蔵場所だけでなく、当会としても長期的展望を考える必要もあります。岸中書庫の見学を希望される方は、開館日いつでもお声掛けください。

（江頭晃子＝運営委員）

「人間の社会」のために学ぶこと

奥田さが子（元・浅川地区社会教育推進委員会委員）

◆美術教育から環境問題へ

市民アーカイブとご縁ができたのは、昨秋の緑蔭トークに参加してからです。八王子の社会教育の基礎を育てた一人である橋本義夫を取り上げた講座の紹介に目が止まったのです。

さまざまな活動に参加してきましたが、どんな活動、運動も、基盤として「学び」が大切だと思っています。歴史を振り返ってみても、しっかりと自立した地域を見ても、それは言えるでしょう。

私は、美術教育に関わる教員でした。人間は、生命体として生き抜くための集団というだけではない「社会」をつくり、文明を生み出し、文化を育て、試行錯誤をしながら発展してきました。社会の中で生きる「人間」としての「感性」はとても大切です。一人ひとりがその個性を生かしつつ伸びやかに生きられる人間社会であって欲しい。そういう社会をつくるのおもとは、「美しいものに感動したり、他人の不幸に心を痛めたり、不正に怒ったりすることのできる感性」が必要です。教育の中でも暮らしの中でも、そういう感性を育む

性（せい）を育むために、五感（ごかん）全てに働きかける「自然」の持つ力



の大きさを実感していたので、地元の高尾山にトンネルを掘るという話が出てきた時、山をまもる運動に関わり、そこからひらいて自然保護や公害、気候危機などの環境問題に深く首を突っ込むことになりました。美術教育と環境問題は生き方の柱になっていきます。

◆社会教育にかかわる

子どもたちに教え、教えられる、図工専科教員として生きがいを持って仕事しつつ、環境保護活動にできるところで関わっていたのですが、地元で市民センターがつくられることになった時、力を貸してほしいと言われて「浅川地区社会教育推進委員会」の委員に加わったのがきっかけで、いわゆる「社会教育」を進める側として関わることになりました。社会教育の場である公民館を目指していたのにコミュニティセンターというのは…と、がっかりしつつ頑

張ってこられた先輩たちの後について、地域に根ざした学びを考えてきました。残念ながら八王子で最後まで残った、地域の自主的な社会教育団体である「浅川地区社会教育推進委員会」は、2021年3月に幕を閉じざるを得ませんでした。これからの形でも今までの成果を引き継いでいけるかを模索しなくては…と思っています。

美術教育と環境問題、社会教育。全ての根底に関わる平和の問題。これらはみな私にとつては異なる分野の関心ごとでなく、自分を見つめ、ものごとを考える、同時に他者と対話しつながら合う、理解し合うためにもだいじな場です。

◆顔を合わせた学び合い

今、どんな情報も簡単に手に入る便利なデジタル時代、といわれていますが、本当にいいことばかりなのでしょうか。私にはとてもそうは思えません。心地よい情報だけを一方的に手に入れて安住し、他者への関心を向けることのない「社会」は、人間から思考を奪う社会になっているような気がします。コロナ禍というだけでなく、生活や働き方の変化も急速に進んで、そもそも「集まる」ことが難しくなったと感じる昨今、インターネットを利用するメリットもも

ちろんありますが、人と人が顔を合わせて学び合う機会は大切です。五感を通して実体験し、手を動かして物をつくり出し、対話しながら違いを乗り越えて着地点を探す、そうしてこそ多様性が花ひらく、「人間社会」が

資料を「探る」会

第2～4回報告

運営委員会が設置する資料部会が資料への理解を深めるための取り組み「資料を探る会」。第1回目は2020年9月6日に開催（本紙20号参照）したが、その後開催した②③④回を報告する。

第5回目の資料を探る会は8月21日（日）を予定している。参加歓迎。

◆「アジア太平洋戦争をどう伝えるか」中村修

第2回は、20年12月6日に開催した。市民アーカイブ多摩に所蔵されている平和・戦争関連のミニコミ45種類の内容紹介と分類化を通じて、ミニコミがアジア太平洋戦争をどのように伝えてきたかに関する報告を行った（本紙22号の「資料棚から⑭」に掲載）。

創り出せるのではないでしょう。地元が多摩地区全体に広がる「市民アーカイブ」の活動にも注目し、できるところで関わっていききたいと思っています。

（おくだ・さがこ＝会員）

◆「ミニコミから変わる私の世界」山家利子

第3回は、21年3月7日に開催。これまで整理の傍らで読んできて印象に残った数多くのミニコミの紹介を行った。自分にとって「心に残る」とは、「知らなかった事実を知る」「深遠な思想に触れる」「一つの物事について、通例とは違う、これまで気づかなかった見方を知る」「勉強になる」「ミニコミの作り手が参考になる」「作り手の熱い思いを感じる」というものであった。都立多摩社会教育会館の市民活動サービスコーナーに勤務していた時代からミニコミを読み始めたことを通じ、ものごとの本質や実情を知られることも述べた。そして、ミニコミはいろいろな問題に直面している人々が出す記録であるがゆえに、間違いがないと思うようになったと、ミニコミの存在意義を強調された。

私の失敗談



岡田 誠
資料整理
ボランティア

市民活動資料室「市民アーカイブ多摩」にはどんな人が集まっているのか。当番・ボランティア・利用者によるリレーエッセイ、開館日にぜひ会いに来てください！

新入会員にしては「ジジイだ！」と思われているかもしれないが、1945年6月に満州国牡丹江市で生まれ、1年かけて香川県に引き揚げてきた77歳の老人です。そんな私の失敗談を白状します（他人の失敗は蜜の味?）。

大学入試は6校受験し、中央大学に。就職試験は10社以上受験しましたが、大型スーパー長崎屋のみ合格。やっと入った長崎屋も55歳の時に破綻、倒産。出世レースも部下の不始末・管理不行き届きでしばしば落馬（降格・降職3回、いずれもしばしばカムバック。後々のためには勲章?）。早く役員になつていれば、会社更生法で倒産した時に失業保険を貰えないのです

が、私は何と11か月も失業保険をゲットしていました（転んでもタダでは起きないゾ!）。

年金受給には5歳不足なので、仕方なく第2の人生として「ISO審査員（環境・品質審査）」資格を取得し、延べ600社の審査をしてきました。

その間、環境保全活動で「森林ボランティア・そらあけの会」に入会し、20年が経ちました。ここでも失敗談（事故・ヒヤリハット）がイッパイあります！

①雨後の竹やぶで足を滑らせ、バンザイ状態で滑落して右肩を脱臼。
②山道の補修中に仮設の足場に乗り転落（危うく20m下の谷底に転落?）。
③檜の枝打ち作業に初めて木登り機を使用した際、操作ミスで

「そらあけの会」訪問記

コロナ禍が小康状態だった昨年暮れ、ネットワーク市民アーカイブの有志6人で、あきる野市養沢に、そらあけの会をお訪ねした。養沢の林業家に生まれた池谷キワ子さんの山を活動拠点とするそらあけの会は、ボランティア市民が森林の維持管理をおこなう市民団体だ。市民アーカイブ多摩でも、『そらあけだより』を数部所蔵している。



宙吊り30分（肥満が辛い）。
ただし、いずれもボランティア保険で通院費をイッパイ稼ぎました（ウッシッシ!）。

（おかだ・まこと＝会員）

2021年8月より、岡田誠さんが、当アーカイブの当番ボランティアとしてお手伝いくださっている。岡田さんが、そらあけの会の中心メンバーであることから、会の活動を見学させていただき、交流したいというのが、訪問の動機だった。

12月6日の当日は、あいにく雨ふりだったが、20名ほどのメンバーが、ぼくたちを迎えてくださり、植林された杉の枝打ちや倒木の片付けなどの作業を

◆「暮らし・生き方と共にあるミニコミと活動」江頭晃子

第4回は、22年2月20日に開催した。報告者が20代から市民活動資料にいかに関与を受けてきたのか、ご自身の生き方が変わったきっかけになった具体的なミニコミの紹介があった。学生時代の戸籍問題との出会い、保育園民営化・不登校などの考え方、西暦記載の卒業証書や自治体への要望書づくりの具体的文書づくりの参考として、化学物質を使わない生活の道具類、3・11やコロナ禍における生活に、どのミニコミから学び、具体的な行動となり、自分の暮らしや考えが変わってきたのかを語られた。20年前に

自身がミニコミに書かれた文書の紹介もあった。

また、市民活動情報誌「市民活動のひろば」発行者としては、どうミニコミから企画や問題の視点を捉えているのかを述べたうえで、資料群としての市民アーカイブ多摩の魅力・目的について熱を込めて語られた。また、現物の紙で発行されたミニコミがその時代の座標となり、定点記録されているが故に時代を超えての検証が可能とも言った。

資料を「探る」会は、まだ4回だが、今後も回を重ね、資料を保存する意味について、深く問いた機会を持ち続けたいと考えている。

（中村修＝運営委員資料部会）

の風土への関心をもちつつ、そらあけの会との交流をつづけてゆきたい。

（杉山弘＝運営委員）

緑蔭トーク第4回

9月24日（土）午後4時15分

養沢からのたより

―林業の現在とそらあけの会

池谷キワ子さん・岡田誠さん

（そらあけの会）

会場・市民アーカイブ多摩

〒204-2536 5535

参加費300円／定員20人

アーカイブ多摩日記

◆事務局移転しました

送付先変更のお願い

3月9日に当会の事務局が移転し、住所・電話番号・メールアドレスが変わりました。送付先等の変更をお願いいたします。

【新住所】〒189-0012 東村山市萩山町2-6-10 1F
TEL: 042-396-2430
FAX: 042-396-2430
info@archive-tama-sakurane.jp

◆2021年度実績データ

総会で報告のあった21年度事業のうち、データを一部ご紹介します。①開館日72日。②来館者数151人。③データ入力数4268点。④新ファイル作成数90タイトル。⑤ファイル総数2003タイトル。紙媒体は減っていますが、まだまだ知らないミニコミとの

出合いが続いています。引き続きの資料のご送付をよろしくお願いします。

◆ながらい根っこ

市民アーカイブ多摩は緑地の中にあり、大木に囲まれています。土の中にもしっかりと根っこが張っています。数年に一度、トイレの流れが悪くなり、見ないふり…たまにだま使用していましたが、責任感の強い当番Sが、勇気をふりしぼってパンドラの箱を開けると…直径約1cm、2mの根っこが…めでたしめでたし。

◆資料整理・収集ボランティア募集中

ミニコミには、市民一人ひとりの思想・行動・知恵が満載。思わぬ出会いに人生が変わった人も。月に1回からでも大丈夫ですので、どうぞお気軽にご連絡ください。

運営委員会など

2月7日 シンポジウム「目録」と検索を考える「開催」参加者23人。
2月18日 第11回運営委員会、参加者7人。会員・カンパ者、当番予定、来館者・各部会から報告（以下毎回）。シンポジウム反省、22年度方針検討、総会議案役割分担、助成金申請内容検討。
2月20日 第4回資料を探る会（報告・江頭晃子）。参加者5人。
3月18日 第12回運営委員会、参加者7人。21年度活動確認、22年度運営体制、各部会の反省と22年度に取り組む内容確認、新規資料寄贈、見学対応。
4月15日 第1回運営委員会、参加者8人。22年度活動方針の柱確認、21年度決算報告、22年度予算検討、緑陰トーク役割分担、運営委員会日程検討。
4月23日 第1回緑陰トーク開催（話し手・山仁士郎）。参加者22人。
5月18日 第2回運営委員会、参加者8人。22年度運営・当番体制確認、総会＆講演会役割分担、助成金報告、講師依頼分担、法政大学訪問報告と見学会他。
5月28日 第2回緑陰トーク開催（話し手・奥田さが子）。参加者15人。

会員数（2022年5月）

168（正会員63人

賛助会員101人・4団体）

◆新規入会ありがとうございます（賛助会員）
大久保博之さん 奥田さが子さん
塚本健太さん 山岸邦子さん

カンパありがとう

（2022年2～5月）

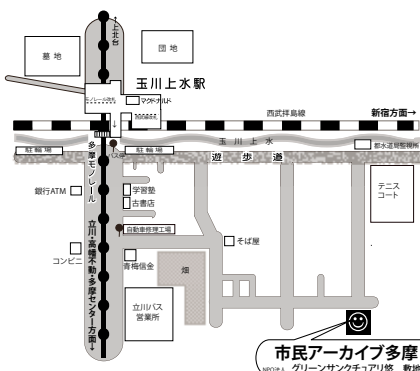
新井勝紘さん 奥田さが子さん
草川幸子さん 駒田和幸さん
鈴木美和子さん 住田啓子さん
高木恒一さん 竹田芳則さん
戸井田久美子さん 富窪高志さん
中村光一さん 丹羽雅代さん
平野 泉さん 麓 常夫さん
堀内寛雄さん 松井隆志さん
松嶋光子さん 三浦 健さん
向井雪子さん 山口真理子さん
吉田美子さん 渡辺 樹さん
みらいの福島子ども基金さん
匿名5人

会員の声

・コロナ禍のなか、活動を継続させてこられたことに拍手をおくります。個人的なことですが、私自身の蔵書や資料の整理に直面しています。市民アーカイブ多摩所蔵資料のバックナンバーの欠号がわかると対応ができるかなと思っています。個人蔵の関連資料の廃棄や焼却なども同時に進んでいます。なかなか伺えないですが、地道でエネルギーを動かすを拝察しています。ご健勝をお祈りします。

編集後記

コロナ禍が話題になって早2年近く。外出の8割以上は市民アーカイブ関連だったことに気づく。当番も会議も、しっかりと務める日々だった。歩いたり会話したりする機会に不足なく、結果心身の健康がキープできているのかも。（江・佐・増・鈴）



市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（8月中旬・年末年始の休館あり）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7
（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）
- ・tel・fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報など）2,000タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp